

デیلیー・ジーザス・ニュース #168

父は良い羊飼いを愛する

ヨハネ10.14-18

14 「わたしは良い羊飼いです。わたしはわたしの羊を知っており、わたしの羊もわたしを知っています。15 父がわたしを知っており、わたしが父を知っているのと同じです。わたしは羊のためには、絶えず命を捨てます。16 わたしには、この羊の囲いにいない他の羊もいます。わたしは彼らも連れて来なければなりません。彼らもわたしの声に聞き従い、一人の羊飼いのもと、一つの群れとなるでしょう。

17 「父がわたしを愛して下さるのは、わたしが自分の命を捨てて、またそれを得るからです。18 だれもそれを私から奪い取ることはできません。私は自らそれを捨てるのです。私にはそれを捨てる権威があり、またそれを再び取り戻す権威もあります。わたしは父からこの命令を受けました。」

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = ^{MT}、マーク = ^M、ルカ = ^L、ヨハネ = ^J、使徒行伝 = ^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、**赤いイタリック体はイエスの言葉を示します**。旧約聖書の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト	
位置	エルサレムの街路
タイムライン	9月 (31月)
イエスの生涯の文脈	第六段階: イエスの後期ユダヤ教宣教
	B. 仮庵の祭りにおけるイエスの宣教
	5. 仮庵でのイエスの最後の教え: 「私は門であり、良い羊飼いである
タイトル	iv. 父は良い羊飼いを愛する

コメント:

今日の朗読は、イエスが「良い羊飼い」としてのメシアとしての役割について最初に語った箇所を締めくくりました。二度目の語り (10.22-42) は、約10週間後の奉獻祭で行われます。

イエスはこの箇所で三つの基本的な言葉を述べました。私たちはその三つを注意深く考え、瞑想する必要があります。

まず、イエスはカペナウムでの「命のパン」の説教 (ヨハネによる福音書第113章) で初めて紹介した (ヨハネによる福音書第6章57節) 極めて啓発的な真理を繰り返しました。

デイリー・ジーザス・ニュース #168

イエスは、信じる者は自分と一つになり、それはイエスが父と一つになったのと同じであると教えました。イエスはこう言われました。 **「わたしは良い羊飼いです。わたしはわたしの羊を知っており、わたしの羊もわたしを知っている。父がわたしを知っており、わたしが父を知っているように。」** 10.14

彼と父との関係と「同じ」であると言うとき、彼は私たちに非常に特別なことを言っているのです。

「他の羊」、つまり将来の異邦人の信者たちについて語り、彼らは最終的には一人の善き羊飼いのもとに一つの群れを形成するだろう、と語りました。

イエスは教会の形成について明確なビジョンを持っておられました。そして **「彼らも連れて来なければならない」と言われました。** 普遍教会はイエス自身の創造物であり、それゆえイエス自身の所有物でした。イエスは教会を愛し、教会のために自らのすべてを捧げられました。

最後にイエスはこう言いました。 **「父がわたしを愛しておられるのは、わたしが自分の命を捨てて、またそれを得るからです。」** (10.17)

これは、ヨハネによる福音書におけるイエスの死の重要な要素、すなわち三位一体の各位格間の愛の表現としての十字架について言及しています。これは、現代のキリスト教においてあまり理解されていない、イエスの死の重要な側面です。これは非常に重要な視点であるため、本日のニュースに、より詳細な解説を加えたセクションを設けました。ぜひお読みください。

さらに、イエスはここで自らを死から蘇らせることについて語られました。新約聖書では通常、父と聖霊がイエスを蘇らせると述べられています。イエスのこの発言は、生物学的な生命が終わった後も、イエスが依然として生きていることを強調しています。イエスが宇宙を創造する前から存在していたように、血肉の体が死んでも、神として存在し続けました。神を殺すことはできない！これがイエスの主張でした。

イエスの善き羊飼いについての教えのこの短い部分 (10.1-18) は、イエスの宣教活動全体の中でも、最も神学的に濃密で力強い部分の一つです。その深淵を探究するには継続的な研究と熟考が必要ですが、そこから得られる宝は努力に見合う以上の価値があります。ヨハネによる福音書のこの部分について、ぜひ定期的に瞑想し、深く考えてみてください。

応用：

父なる神は、十字架上で命を捧げたイエスを愛しておられます。イエスは父なる神への愛の表現として十字架に耐えられました。父なる神と子なる神にとって、十字架は互いに愛し合うための耐え難い道でしたが、そうすることは彼らの栄光でした。

愛は、愛する人々にとって最も容易な道を求めるのではなく、たとえ無限の犠牲が必要であったとしても、彼らにとって最善のことだけを求めます。

あなたは神への愛ゆえにどんな苦難に耐えていますか？

デイリー・ジーザス・ニュース #168

イエスの例は、イエスのために困難や苦しみに耐えることをあなたにどのように励ましますか。

補足：「必要なパレードの変更」

「父は私を愛し続け、

なぜなら、私自身が自分の命を捨て、再びそれを取り戻すからです。」

ヨハネ10.17

の愛が私たち罪人に対してどのように示されたかということばかり考えてきました。十字架について聞いた
り見たりした説教、聖書研究、書籍、ウェブサイトのほとんどすべては、十字架が私たちにとって何を意味
し、何を成し遂げてくれるのかに焦点を当ててきました。

それはそれで結構です。三位一体の計画における十字架の栄光は、私たちを罪と私たち自身から完全に永遠
に救うためにどれほどのことを語り、どれほどのことを学んでも、私たちはいくら語り尽くすことも、十分
に学ぶこともできません。しかし、十字架の最大の栄光は、それが私たちではなく、神のために意味し、成
し遂げることなのです。

イエス・キリストの死と復活は、三位一体の神によって完全に構想され、成し遂げられた救いの出来事であ
るため、三位一体の神のみがそれを完全に理解し、その価値を認めることができると同時に、私たちにとっ
ては素晴らしい神秘であり続けます。十字架の栄光と力のすべてを理解し、その中に入るために、神の全知
性が必要です。これらの出来事は神にとってどのような意味を持つかによって、私たちを救うために最大限
の効果を発揮します。

父、子、聖霊は十字架を通して互いにこの上なく愛し合いました。イエスは、ご自身の救いの業におけるこ
の最も栄光に満ちた側面を私たちに示してくださいました。十字架が私たち一人ひとりの罪人に対する神の
愛をどのように示しているかを考える前に、三位一体の各位格が十字架を通して互いに愛し合った様子を、
深く、そして敬虔な気持ちで見つめる必要があります。宇宙史上最大の出来事を通して、これほどまでに力
強く互いに愛し合った三位一体の神が、同じように私たちをも愛してくださること、これこそが十字架の究
極の栄光なのです。

したがって、十字架のおかげで父が子に対して抱く愛、十字架を通して父に対して抱く子の愛、そしてそこ
で示された父と子の両方に対する聖霊の愛を私たちが見ることができるとき、私たちに向けられた同じ愛
は、私たちがかつて見たことも知ったこともないほどに、神の栄光で輝き、きらめくでしょう。

私たちはここで掘り下げて、大きなパラダイムシフトを経験し、三位一体の位格の間で知られ表現された十
字架の愛に栄光を捧げることを学び、イエスが死んで復活したときに起こったことの永遠の焦点を三位一体
の位格の互いの愛にすることを学ぶ必要があります。

今日の聖句の中で「なぜなら」という言葉を用いていることに注目してください。「父はわたしを愛し続
けておられる。わたし自身が命を捨てるからである...」

デイリー・ジーザス・ニュース #168

が父の愛について語った残りの言葉はすべて、その愛のあり方と性質を説明しています。これはイエスが父の愛の具体的な理由を述べている唯一の言葉です。この言葉は、イエスが父の愛の対象であった「理由」を私たちに教えてくれます。」「わたし自身が命を捨てるからです。」「

さらに、イエスはヨハネによる福音書14章31節で、なぜ命を捧げることを選んだのかを説明しています。

「わたしが父を愛し続けていることを、世が確かに知るように、わたしはこうするのです...」。イエスにとって十字架は、父への究極の愛の宣言でした。父と子の互いへの愛は、十字架において他に類を見ないほど交わり合っていました。

父なる神ご自身の証しについて考えると、福音書の中で、ヨハネによる福音書10章17節でイエスが語られた言葉の力強い裏付けを見出すことができます。イエスの生涯において、父なる神が文字通り世界に向けて聞こえる声で語られたのは三度ありました。それは、洗礼の時、変容の山上、そして十字架の二日前の受難週の火曜日でした。これら三つの出来事はすべて、十字架に直接的かつ具体的に関連していました。

父なる神が人間の言葉で、聞き取れる声で語られることがいかに稀なことか、考えてみてください。それは天地創造以来たった4回しかありません！そのうち3回はイエスの宣教活動の時代に起こったと私たちは指摘しました。他の唯一の状況は、シナイ山で、旧約聖書が神の降臨とともに制定されたとき、モーセを通しての律法（出エジプト記 20-24章）。

この場面が再びイエスの死を指し示し、永遠の第二の契約を確立したことは注目に値します。父なる神は、旧約が一時的な必要条件であり、動物の犠牲を通して私たちの良心を罪から清める力を持たないことを十分に理解していました。旧約は、血まみれの動物の犠牲によって鮮やかに描かれた、神ご自身の御子の死という未来の現実を待ち望んでいました。ですから、歴史の中で父なる神が声に出して語られるたびに、それは御子の死と関連づけられてきました。

父なる神はどのようにして御子の死と復活を公に証しされたのでしょうか？イエス

」、の生涯における三つの出来事のうち、二つ（洗礼と変容）には**これはわたしの愛する子、わたしの愛する者である...**」という同じ言葉が含まれています。

これをご覧ください: 父が天からイエスの死について語ったとき、その中心となるテーマは「**私は息子を愛している！**」でした。父は沈黙することはできませんでした。父は、すべての被造物が知り、信じることができるように、息子に対する永遠の愛を宣言しなければなりませんでした。

なぜ神はこの子をそれほど愛しているのでしょうか？それは、同じ愛によって死ぬ御方だからです。ヨハネの福音書には、父と子の間に分かち合われた愛について12の記述がありますが、そのうち6つは十字架についてです。

要するに、父なる神は、御子が十字架に架かる覚悟を示されたことへの愛を宣言しなければならなかったのです。これこそ、この宇宙が知る限りの、究極の誇り高き父なる神なのです！要点は明白です。

デイリー・ジーザス・ニュース #168

のあなたへの愛として考えていますか？十字架で示された父、子、聖霊の互いへの愛について、どれほど頻繁に考えていますか？もしこれがあなたにとって新しい視点であるなら、三位一体の視点を通してイエスの死を見ることができるようにお祈りください。